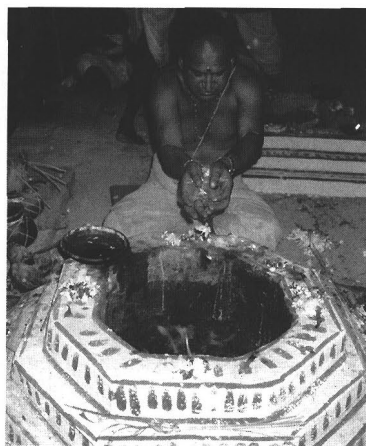


称される数多くの聖典を作り、それを絶対的権威として仰いでいた。

これらヴェーダ聖典にもとづいて発達した宗教はバラモン教と呼ばれることがあるが、ヒンドゥー教とまったく別の宗教ではない。現代でもインドの人たちはこの初期の宗教を含めて全体をヒンドゥー教と呼んでいる。「バラモン教」という言葉はヨーロッパ人研究者の用いた述語「ブラーフマニズム」の訳語で、インドの言葉でそれに近いものはあるが完全に相当するものはない。しかしヴェーダにもとづき祭式万能主義の宗教と、その後先住民の民間信仰と混淆くわんごうしつつ多くの思想家や宗教者の教義に裏付けられて発達したヒンドゥー教とを比較すると、宗教形態の上でさまざまな相違が認められるので、バラモン教という概念は有効であると考えられる。

ヴェーダ聖典にはさまざまな祭祀が含まれるが、清浄な場所を選んで祭壇（炉）を造り、特定の神を選んで祭壇の火のなかに供物を捧げ、その後祭壇を取り壊すのが基本である。祭火はその煙とともに天界にいる神々に供物を届けるものとして重視され、火神アグニそのものと考えられた。ちなみに祭火のなかに精製、バターや穀物を入れることを「ホーム」というが、この言葉は仏教で「護摩」と漢訳されて日本にも伝わった。施主は司祭であるブラーフマンを通して神々に子孫繁栄や無病息災、あるいは降雨、豊作、戦勝、死後の生天などを祈願した。ブラーフマンは神々に意思を伝達することのできる存在として、その後のインド社会のなかで絶大な權威を保つこととなった。



ホームの儀式（タミルナードゥ州）

ヴェーダ聖典

ヴェーダ聖典はインド・ヨーロッパ語族のもつ最古の文献であり、古代インドの宗教や思想を知る好個の手がかりになるのみならず、言語学や比較思想の研究においても重要な資料となっている。現代でもヒンドゥー教徒は自分たちの宗教の源泉はヴェーダ聖典であると考えている。ヒンドゥー教の別名である「サナータナ・ダルマ」（永遠の法）は、連綿と伝承されてきたこのヴェーダ聖典の權威を意味する言葉である。

「ヴェーダ」という言葉は「知る」を意味するサンスクリット語の動詞語根ヴィドから作られた名詞で、知識一般を指すが、とくに宗教的知識を意味するようになり、さらにその知識が集成された聖典の総称となった。ヴェーダ聖典は人間や神によって作られたものではなく、聖仙が神秘的靈感によって感得した「天啓聖典（シユルテイ＝聞かれたもの）」とされ、単にヴェーダと呼ばれることもある。

ヴェーダ聖典には次の四種がある。

①『リグ・ヴェーダ』：主として神々に対する讃歌（リチュ）が集められたもので、本集は一〇二八讃歌を含み、前一二〇〇年頃を中心に前後数百年のあいだに成立したと考えられている。神々を祭場に招き、讃誦を行うホトリ祭司に属する。

②『サーマ・ヴェーダ』：これは歌詠の集成で、大部分は『リグ・ヴェーダ』の讃歌と同じだが、独特の旋律（サーマン）で読経される。歌詠を行うウドガトリ祭司に属する。

▼ヴェーダ聖典は『リグ・ヴェーダ』『サーマ・ヴェーダ』『ヤジュル・ヴェーダ』『アタルヴァ・ヴェーダ』の四系統がそれぞれ本集・祭儀書・森林書・奥義書の四部門を持つが、聖典の数は四×四点で構成されているわけではない。四系統の内部分裂があつて本集もそれぞれいくつかの派に別れている。祭儀書以下もさらに分派が生じ、数多くの文献が生み出された。各派に伝承された聖典の書名については、辻直四郎『インド文明の曙』（岩波新書）巻末のヴェーダ文献一覧表が参考になる。

▼天啓聖典と伝承聖典

ヒンドゥー教の聖典は二種に大別される。一つは「天啓聖典（シユルテイ＝聞かれたもの）」と呼ばれるヴェーダ聖典である。もう一つは、聖仙たちが作つたとされる「伝承聖典（スムリテイ＝記憶されたもの）」で、天啓聖典に次ぐ權威が与えられている。伝承聖典に何が含まれるかは諸説あるが、一般に、ヴェーダの補助学書（ヴェーダーンガ）、二大叙事詩、プラーナ聖典、マヌ法典などの法典類が入ると考えられている。